僕の世界

彩月空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕の世界

【Ｎコード】
Ｎ１９４６Ｆ

【作者名】
彩月空

【あらすじ】
その日、僕の世界はぶっ壊れた――。当たり前の世界が、また別の当たり前の世界へと変わる。そのきっかけを作ったのは君だった。そんなショートストーリー。

……そうか。

こんな気持ちのときに“友人”という存在を欲するんだ。

ようやく気づいた。

僕には“友人”と呼べるような人間が誰一人としていない、ということに――。

（随分と、もったいない時間を過ごしてきたんだな……）

僕は自嘲気味に笑うとベンチに腰掛ける。

降りしきる雨のせいか、公園には人っ子一人いない。

今、この空間に僕しかいない。

聞こえる音は雨の降る音だけ。

でも、それはなんだか心地よかった。

いつからだったろう。

僕が自分をひとりぼっちだと思うようになったのは……。

来る日も来る日も、まるでそこにしか向かえないかのように、僕の足は学校へと向かう。

無味乾燥な授業を受け、たいして面白くもない友人の話に笑顔を作る。

僕と同じ年齢の人間が存在する教室の中で、ただひたすらに孤独を感じた。
自分の部屋にひとりでいることが孤独なのではないことを知った。
周りにいくら友人がいても、ここにいる僕は孤独だった。

惰性で続ける部活に出て、何かから逃げるように足早に家に帰る。
それが当たり前で、僕の世界の全てだった。

悲しくなかった、と言えば嘘になる。
それが正しかった、と言えば嘘になる。
友人なんていらない、と言えば嘘になる。
ひとりでも平気だった、と言えば嘘になる。
誰とも話したくなかった、と言えば嘘になる。
ひとりでも淋しくなかった、と言えば嘘になる。
皆と遊びたくなんてなかった、と言えば嘘になる。
誰かと一緒にいたくはなかった、と言えば嘘になる。
泣きたくなることなんてなかった、と言えば嘘になる。
その笑顔の中に混ざりたくなかった、と言えば嘘になる。

それが僕の世界の全てであっても良い、と言えば嘘になる。

きっと僕はただ逃げていただけなんだろう。

誰かと近づきすぎると、離れるのが怖くなる。

誰かと親しくなりすぎると、それを失うのが怖くなる。

それなら、距離を置けば良い。

はじめから、何もなければ良い。

そんな屁理屈ばかり言って、逃げていただけなんだ。

本当は欲しくて欲しくてたまらなかったんだ。

友人が欲しかった。

友人との思い出が欲しかった。

人とのつながりが欲しかった……。

人のぬくもりが欲しかった……。

自分の全てをさらけ出せる相手が欲しかった。

今更ながら、そんなことに気づいた自分が嫌で嫌で仕方がなかった。

もっと早くにそのことを認めていたならば、どれだけ救われただろうか。

――雨が強くなってきた。

こんな日は太陽の光を浴びるよりも、冷たくて暗い雨を浴びるほうがよっぽどマシだ。

僕にはきっと、そっちの方が向いている。

「……樹……君っ！」

どこかで僕の名前を呼ぶ声が聞こえる。

それは、多分空耳だろう。

こんな雨の中、僕を捜しに来てくれる人なんていない。

セリヌンティウスにはメロスがいた。

メロスならば、セリヌンティウスのためにこんな雨の中でも走ってくるだろう。

……でも、僕にはメロスなんていない。
王による処刑を今か今かと待ち続ける哀れなセリヌンティウス。
僕を迎えに来てくれるメロスなんていない。
いないんだ……。

「和樹君！」

いないんだっ！！

僕は思わず耳をふさいだ。
その声は僕のすぐそばから聞こえた。
空耳なんかじゃない。

夢でも空想でもない。

僕の名を呼んでいる人がいる――。

「やっと、見つけた」

僕はその人の方に顔を向けることができなかった。

こういうとき、どんな顔をすれば良いのか。

そんな知識を持ち合わせてはいなかった。

「こっち、向いてよ……」

向けない。

「ねぇ……」

今の僕の顔を“この人”に見せるわけにはいかない。

なんでだろう……。

この人の前では、今の自分をどうしても見られたくはなかった。

「ねぇってば！」

無理やりといった感じで、彼女の方に顔を向けさせられた。

「……和樹、く、ん？」

驚いた顔が僕を見つめていた。

果たして僕の顔はいったいどうなっているのだろうか。

「泣いてるの？」

あぁ、泣いているのか、僕は。

頬を伝う水滴。

これは雨じゃないんだ。

僕は泣いているんだ。

なんで？

悲しいから？　淋しいから？

違う。

嬉しいからだ。

「雨、ですよ」

「嘘」

「嘘じゃないです」

「嘘よ！」

気づいた。

泣いているのは僕だけじゃなかった。

彼女もまた泣いていた。

だから僕は意地を張るのをやめた。

「どうしたんですか？」

「あなたを捜しにきたのよ」

「そうですか……」

雨の中、傘もささずに彼女は僕を捜しに来てくれたらしい。

自慢の綺麗な髪の毛と可愛らしい顔が泥だらけになっている。

足にも靴にも泥がはねて、普段の清楚な彼女からは想像できないくらいに汚れている。

でも、なんだか僕は今の彼女がこの上なく美しいと思えた。

「……か、和樹君？」

いきなり抱きしめてしまったことは、正解だったのだろうか。

いきなり大声を上げて泣きじゃくってしまったことは、正解だった

のだろうか。

「優香さん。僕は――」

「いいのよ、和樹君。無理しなくても。言いたくないことは言わなくてもいいから。いつか整理ができたときに、私に話してくれればそれでいいわ。でも、今はこのままで居させて……」

その言葉を聞いて、僕は初めて誰かに内心を吐露する決意を固めた。

誰にも語ったことのない、僕の全てをこれからこの人にさらけ出す。

初めてだった。

誰かに甘えたい、と思ったのは――。

彼女の腕の中は、とても温かかった。

そこには、確かなぬくもりがあった。

嘘じゃない。

僕は彼女が果てしなく愛おしい。

愛おしくて、たまらない。

きっと、これが人を愛する、ということなんだろう。

その日、僕の世界の全てがぶっ壊れた。

君の存在があったからだ。

君は、僕の世界をいともたやすくひっくり返した。

誰にも会わなくてすむ休日が楽しみで楽しみで仕方がなかったはずなのに、

今では、億劫で仕方がなかった月曜日が待ち遠しい。

月曜日が来ることが嬉しい。

君に会えるから。

来る日も来る日も、まるでそこにしか向かえないかのように、僕の足は学校へと向かう。

授業は相変わらず無味乾燥だが、たいして面白くもない友人の話に大げさに笑い声を立てた。

僕と同じ年齢の友人が存在する教室の中で、僕はただひたすらに君を欲した。

ふたりでいたいのにひとりでしかいられないことが孤独なのだと知

った。

周りに幾ら友人がいても、君がいなければ僕は孤独だった。

本気で取り組んだことなどない部活に出て、君の姿を見かけると必死に練習に打ち込んでみせた。

それが当たり前で、僕の世界の全てになった。

Ｆｉｎ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1946f/

僕の世界

2011年1月29日14時52分発行